



みつは

笠間市立友部中学校
学校だより 第65号
令和7年3月13日(木)
みんなで取り組もう3あッブ
あいさつ あとしまつ ありがとう

第43回全国中学生人権作文コンテスト 入賞作品「悪口」

悪口を言って人を傷つけてしまったことがある。その時の記憶が時々顔を出して、私の心をざわざわさせる。

その日、遊ぶ約束をして集まった友達数人と夏休みの宿題の進捗状況や、最近ハマっている推しの話など、たわいのない話で盛り上がっていた。そのうち話題は部活動や学校の話と移っていき1人の友達の話となった。私もたまたまその子のことで困っていたことがあったので、つい話に乗ってしまった。始めのうちはただの相談会のような雰囲気だったのだが、その子のせいで困っていることや腹が立ったことなどを話すうちに、みんなの気持ちがたかまってしまったのだろう、話はどんどんエスカレートし悪口に発展してしまった。私もたいして気になってはいなかったことに対しても「わかる。わかる」と共感してしまっていた。そのうちに私たちの会話を聞いていた。1人の子が「やめようや」と言って私たちを止めてくれた。その瞬間なんともいえない気まずい空気が流れ、私はしばらく何も言えなかった。振り返ってみると、その時の私には盛り上がっていた空気を壊されたと言う不満の気持ちの方が強かったのではないかと思う。その後、私たちが言ってしまった悪口が本人の知るところにより深く傷つけてしまった。「ばれなければいい」という考えのもと、無責任な発言をし、それを共有することで生まれた連帯感。そんなゆがんだ仲間意識は実は「いじめ」なのだということにこの時の私は気づいていなかった。

集団生活の中では、日々いろんなことがある。当然自分と合わないなと感じる人も出てくるし、考え方の違いや意見が行き違うこともある。そんな不満がつい「悪口」と言う形で出てしまう事は、正直誰にでもあるということではないかと思う。しかし、私たちが間違っていたのは、1人の子をネタにして「悪口」と言う行為を楽しんでしまったこと。そして、もし自分が「悪口」を言われた側だったらという想像力が欠けていたことだ。本人のいないところで、この中傷は「いじめ」だ。

私はその場の空気に流されて、深く考えずに行動してしまう弱いところがある。私自身、過去に冷たい言葉を吐かれて傷ついた経験があるのに「悪口」を言う自分を止めることができなかった。あの時、相手の気持ちを考えなかったこと。そして、第三者が止めてくれなかったら「悪口」はもっとエスカレートしたかもしれない。そう考えると、自分の軽率な行動がますます許せなくなる。一度吐いてしまった言葉は二度と取り消すことができない。深く反省し、友人にも謝罪をした。友人は謝罪を受け入れてくれたが、友人との関係は元通りというわけにはいかず、小さなしこりが残ったままだ。

空気を読むという言葉がある。その場の空気を敏感に察知して、うまく行動することだ。反対に空気が読めないことを揶揄(やゆ)する言葉「KY」という言葉も生まれた。ノリが悪かったり、場の盛り上がりに参加しなかったり、

時には「正義」さえも茶化してしまう言葉だ。その言葉のせいにつもりではないが、この「空気を読む」ということに、私たちはものすごく敏感で縛られているような気がする。「空気が読めない子と思われたくない。」そんなマイナスの感情が行動にも表れてしまっているように思うのだ。あの時、「悪口」を止めてくれた子は、あの瞬間私たちの中では「KY」だった。せっかく盛り上がっているのに、自分だけいい子ぶって。陰口を止めてくれなかった子にとって「止めようや」の一言がどれだけ勇気が必要とする行動だったのかということが、今ならわかるし、素直にすごいなと思う。

今年の夏休みはパリオリンピックが開かれ、多くの日本人選手の活躍が連日報じられた。一方で、負けた選手の言動に対して、多くの誹謗中傷がSNS上に書き込まれたと言うマイナス面が取り上げられた。このニュースを聞いて、なぜ頑張った選手に対して嫌なことを浴びせるのか、匿名であることを利用して悪意なる言葉を書き込むなんて、卑怯だと腹が立った。しかし、その一方で、私がやったことも、本質的にはこの人たちと同じなのではないかということも気づいた。本人のいないところで悪口を言う、「ばれなければいい」という点でこの卑怯な人たちと同じではないかと。

もし、あの日に戻れるとしたら「直接本人に言ったら？」という一言が言えるだろうか。あの日から1年、傷つけた友人と何のわだかまりもなく、会話ができるようになるまでの時間は、私自身の弱い部分や課題と向き合う時間だと思っている。この後悔を二度と繰り返さないよう自分の言葉には責任を持ち、相手の立場に立って考えられる人になりたいと強く思っている。

法務省人権擁護局・全国人権擁護委員連合会主催 「第43回全国中学生人権作文コンテスト入賞作文集」